

今福龍太著  
『群島―世界論』

岩波書店 二〇〇八年一月

「群島」(archipelago)には、大陸・国家・領土の歴史とは異なる時空間が息づいている。そこで育まれた言葉は、世界の時空間をずらし、反転させるような眩暈をひきおこす。

たとえば、本書の五章「二世の井」に描かれる奄美群島・沖永良部の島ことば「旅(タビ)」。東京生まれの沖永良部二世の作家・干刈あがたが、父母の故郷の島を訪れて耳にしたのは、「タビの冬は寒いでしょう」「タビは人が多いから生活も大変でしょう」といったねぎらいの言葉だった。

この「タビ」とは、たんに船旅や旅行のことではなく、島にたいする「本土」、さらには「本土」での暮らしの総体を指している。この言葉には、多くの島人が故郷をはなれて離散し、異郷での暮らしを重ねてきた時空間が息づいている。干刈あがたが東京で生まれ育ってきた二十数年の暮らしは、島人から見るとき、異郷における「タビ」の継続として現われる。その言葉を聴くとき、大地の上での定住は、船旅の揺れとともに、多島の流動のなかにひきこまれていく。

本書で描かれるのは、このような言葉の響きを聴きとりなが

ら、「島渡り」をくりかえすことによつて感受され、その姿を現わしてくる「群島地図」である。メキシコ湾にそぐ大河ミシシッピのデルタ地帯にはじまる旅路では、カリブ海、奄美、アイルランド、ヴェネツィア、さらに幻の「ブラジル島」や「カリフォルニア島」など、さまざま具体的な場所が、時空間をこえて、錯綜する補助線によつて結びあわされていく。

そこで聴きとられ、読み解かれるのは、フォークナーを読むエドゥアール・グリッサン、ギリシア・アイルランド・ニューオーリンズ・日本を流浪したラファディオ・ハーン、奄美・沖縄に出会い「ヤポネシア」論を紡ぎだした島尾敏雄、カリブ海の群島を渡り歴史の瓦礫を生きだした詩人デレク・ウォルコット、英語詩と訣別しゲール語で「私は舌」(Teanga Mise)と記したマイケル・ハートネット、インド系クワリーの末裔としてガイアナに生まれイギリスへ移民した詩人デイヴィッド・ダビデインなど、越境する狭間の生を生きだした文学者たちの言葉である。

時空間の歪みに分け入るこの旅路では、方法としての「時間錯誤アナクロニスム」と「空間錯誤アナロキスム」が自覚的に選びとられている。そこに浮かびあがるのは、世界を反転させ、別様に感受していくような惑乱する迷宮である。

その迷宮は、東欧を旅した島尾敏雄が、幾たびも国境の移動を経験し、亡国・廃滅を生きだポーランドに感受したのもでもあった。「錯誤をかさねて一枚あわせのガラスの領域図を右にずらせ左に移しているうち、現在の立場にようやく焦点が合った様子なのだが、それがこのまま動かすにすむとも思えない」。そのとき彼は、「自分の中に含みもつ混沌の地下道」を感

じていた。

それはまた、震洋隊（海上特攻隊）の基地だった横穴を、各地の「浦」に訪ね歩いた島尾敏雄の足跡を辿りなおしながら、未知の「群島地図」を「既視感」とともに幻視した今福氏の経験でもあるだろう。

そして、この万華鏡のような書物を読みすすめる読者もまた、時空間の眩暈のなかで、幻聴のような響きに出会うことになる。

沖繩・コザのアイリッシュ・パブで開かれた多言語朗読会で、沖繩の詩人・高良勉が琉球語で読んだ、ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』の一節。「あんしんわんねー、うみちつちしかんさつてい、くるしみらつとーる民族ぬ一人んやいびーくとうよー」（それにぼくは、忌み嫌われ迫害されている民族に属していません）。

このような声の響きに寄りそっていく「島渡り」は、たんに越境する軽やかな快楽の道行きではない。大陸・帝国の力によつておしひしがれ、散種された歴史の瓦礫を、その苦楽とともに抱きとりながら一つ一つ拾いあつめ、別の世界を夢みていく旅路である。

その企ては、具体的な場所にこだわりながら、そこで発せられた密やかな言葉に触発されて、時空間をこえていく旅である。本書の終章はいう。

重要でないものはない。すべてのものは重要である。……小さな差異こそに気づき、併合することも包含することもせず、その小さな差異を永続化させ、その差異の上に「わたし」の位

置を見いだすこと。

ここにあるのは、「神は細部に宿りたまう」、あるいは「神のみぞ知る」といった慣用句にあるような、全世界を統括する一神教的な眼差しではないだろう。「世界」と「反世界」の狭間で、幻のように立ちあらわれる別様な〈世界〉。そこには、新たな認識論・存在論に裏打ちされた〈詩学〉が息づき、別様に離散する〈神学〉が垣間見られているかのようである。

その旅路が次にめざすのは、「群島―世界論」内陸篇とされる。その鍵となる「沙漠」に分け入るとき、刻々と揺れうごく風紋とともに大陸は流動し、多島海へと溶けほぐされていくだろう。そこに立ちあらわれる〈群島世界〉が、どのような言葉とともに響きわたるのか。待機しつつ耳を澄ませたいと思う。

（米谷匡史）